



最先端の印刷技術と 卓越した職人技のマリアージュ。 高難度、ハイリスクの仕事で利益率を拡大。 スピードマスターCX75

- ・CX75 のワンマン運用で毎時 2 ~ 3 ジョブを処理
- ・XL75 と同じ倍径圧胴に惚れ込んで導入を決断
- ・ハイデルベルグ機の耐久性と信頼性を高く評価
- ・特殊紙や特色など高難易度の仕事で利幅を拡大

プロの技術が光る印刷会社のための印刷会社

日本一高いビル「あべのハルカス」から車で 5 分ほど、大阪市東住吉区に本拠を構える有限会社樋口印刷所は、下請け率が 9 割を超える「印刷会社のための印刷会社」です。従業員はわずか 13 名と少数精鋭ですが、その多くが印刷機オペレータとしての高い技術と経験をもつ職人気質の熟練スタッフばかりです。このため顧客である印刷会社が次々と持ち込んでくる難しい仕事に対しても、一目見てその場で「できる」「できない」を即断できる「対応力の速さが強みだ」と代表取締役社長の樋口裕規氏は話しています。そして「できない仕事はほとんどない」という、プロに鍛えられたプロによる卓越した技術力こそが真の強みとなっています。創業は昭和 45 年。1 台のハイデルベルグ機からはじまった同社の事業は 50 年の歴史を刻みながら、地元である大阪エリアで確かな地歩を固めてきました。現在は 2 色機から 4 色機まで菊半裁判クラスで統一した 5 台の印刷設備を有し、そのすべてがハイデルベルグ機であることもまた、顧客の信頼を勝ち取る上で大きな力になっていると樋口社長は指摘します。しかも「最初の KORD は 40 年間使い



代表取締役社長
樋口 裕規 様

成功を支える真のマルチタレント スピードマスター CX75

- ・ピークパフォーマンスクラスのスピードマスター XL75 のプラットフォームに、スピードマスター SX74 の長所を組み合わせて開発。
- ・一般的な印刷用紙からカードボード、フォイルまで広範囲な用紙に対応したすぐれた柔軟性を実現。用紙厚は標準で 0.03 ~ 0.6mm、オプションで 0.8mm まで対応可能。
- ・毎時 15,000 枚の最高生産速度で、卓越した印刷品質を達成。
- ・XL75 と同じ倍径の圧胴を採用し、スムーズで安定した用紙搬送を実現。
- ・用紙サイズ/用紙厚にあわせて用紙ガイドやエア量などを自動設定するプリセットプラスフィード/デリバリーを採用。

続けた」とハイデルベルグ機の高い安定性と耐久性に絶大な信頼を寄せ、「長い目で見れば確実に儲かる印刷機だ」と絶賛しています。

スピードマスター CX75 の日本 1号機を導入

同社は創業以来、一貫して刷り専門の下請け業者として歩んできました。創業当初はチラシやパンフレットなど商業印刷を中心に事業を展開。当初 1 台だったハイデルベルグ機を増設しながら、現在では菊半裁判クラスのスピードマスター機 5 台（2 色機 2 台、4 色機 3 台）を保有するまでに業績を拡大しています。ただ 50 年を経て、同社の仕事内容は大きく変わりました。チラシやパンフレットなど商印の仕事は激減し、シールやパッケージ、ラベルなど包装関係の仕事、特色の仕事が急増しました。和紙や不織布、フォイル、ユポ、厚紙など特殊紙を扱うことも多く、印刷会社が持て余す難易度の高い仕事、リスクの高い仕事が大阪各地から樋口印刷所に集まるようになりました。きっかけは 10 年前に同社が日本で初めて導入したハイデルベルグの菊半裁判 4 色機スピードマスター XL75-4 でした。この XL75 は倍径の圧胴とエアによる無接触の用紙搬送で、薄紙から最大 0.8mm の厚紙まで幅広い仕事に対応でき、厚紙印刷を得意としてきた同社の確かな基盤となりました。これに対して普通紙の仕事は 2 台の菊半裁判 4 色機（スピードマスター SM66-4H）が担っていました。導入から 21 年間で約 2 億枚の通し実績がある、同社の成長を牽引してきたベテラン機ですが、今年 8 月、内 1 台を最新機種スピードマスター CX75-4 に入れ替えました。その理由について樋口社長は次のように語っています。「厚紙の仕事が増えてきたので、XL75 をもう 1 台入れたいと考えていました。ただ工場の設置スペースに制限があるので、コンパクトで場所をとらない CX75 を導入することに決めました。CX75 も上位機種の XL75 と同じ倍径の圧胴を搭載しているので、用紙搬送性能に差はありません。最大紙厚も 0.6mm まで対応するなど、XL75 と比べて遜色はありません」

同社の印刷設備を保守管理し、トラブルゼロの運用を図っているテクニカルマネージャーの中谷和美氏も「XL クラスをベースに機能をシンプル化したコストパフォーマンスにすぐれた印刷機だ」と高く評価しています。今回、同社が導入したスピードマスター CX75 もまた、10 年前の XL75 同様、日本 1 号機となりました。

CX75 のワンマン運用で毎時 2～3 ジョブを処理

印刷会社から依頼される多種多様な仕事を迅速に処理するためには、印刷機にあわせて仕事をうまく割り振らなくてはなりません。このため同社では 2 台の 2 色機（15 年前導入の PM74-2 と昨年導入の SX74-2）には 1/1 色の両面印刷や特色印刷を、4 色機の SM66-4 には普通紙中心、XL75-4 には厚紙中心、そして新しい CX75-4 にはコート紙でプロセス 4 色など「レギュラーの仕事」を任せることで、無駄のない効率的な生産体制を構築しています。新しい CX75 はコート紙でも従来機のようにキズやコスレに気を使わなくて済むため、生産性が飛躍的に向上しました。紙積みから色出しまですべて一人で行うワンマンオペレーションでも 1 時間あたり 2～3 ジョブを処理でき、1,000 枚以下の仕事なら 1 日の平均仕事量は 16 台から 20 台に増えて、残業



テクニカルマネージャー
中谷 和美 様

時間も平均 2 時間短縮できました。担当オペレータは「印刷機に集中できる」「汚れやコスレなどが気にならない」「紙の流れがスムーズ」「前準備の手間が少なくなった」と CX75 を絶賛しています。操作性、作業性も、慣れ親しんできたハイデルベルグ機とあって、導入からわずか 1 週間で使いこなせるようになったそうです。印刷機をハイデルベルグに統一することで、たとえ担当オペレータが休みでも「誰かが動かせる」そんな工場環境が同社には出来上がっていました。

職人技を支える最先端の印刷技術

同社の製版部門にはハイデルベルグのスーパーセッター A105 が導入されていますが、1 日の出力版数は全使用量の 3 割弱（約 80 版）ほどで、残りの刷版は顧客支給によるものです。刷版だけでなく本紙を支給されるケースも多く、印刷オペレータは予備紙に限りのあるなかで「顧客が満足する印刷品質を達成しなくてはならない」と樋口社長は指摘します。

「当社には 160 社を超える大阪圏内の顧客から毎日毎日、実に様々な仕事を持ち込まれてきます。印刷オペレータはつねに違う用紙、刷版、絵柄に向きあいながら、真剣勝負でスピーディかつ正確な色出しを行っています。お客様が持参した色見本と同じ色を出すことが目標なので、キズ付きやコスレを気にしないで済む、前準備に手間のかからない CX75 は最高のパートナーといえるでしょう」

まさに CX75 に搭載された倍径の圧胴や用紙搬送技術、用紙ガイド／エア量の自動設定機能などハイデルベルグの最先端技術が、樋口印刷所の職人技を支えています。価格競争の激しい一般商業印刷から、印刷会社が嫌がる厚紙、特殊紙、特色など高難度・ハイリスクの仕事、付加価値の高い仕事へと事業内容をシフトすることで、売上は減っても利益率は大きく拡大しています。厳しい印刷業界のなかで中小の印刷会社が生き残るひとつの道を、樋口印刷所が示しているのかもしれない。

有限会社樋口印刷所

〒546-0041 大阪市東住吉区桑津 1 丁目 6 番 12 号
TEL.06-6714-7756
FAX.06-6714-7776
<http://higuchi-print.co.jp/>